

「トゥキディデスの罠」

双日総合研究所 チーフアナリスト 大矢 伸

5 月半ばに北京で米中首脳会談が行われた。初日の 14 日に人民大会堂で行われた会談の冒頭で、習近平主席はトランプ大統領に、米中両国はいわゆる「トゥキディデスの罠」を乗り越え、大国間の関係の新たな形を切り開くことができるか、と問いかけた。

「トゥキディデスの罠」は、ハーバード大学のグレーム・アリソン教授が 2017 年に出版した *Destined for War*（『米中戦争前夜』）で提示した概念だ。トゥキディデスはアテナイの歴史家でペロポネソス戦争に関する『戦史』を今から 2500 年ほど前に執筆する。ペロポネソス戦争は、紀元前 400 年代に起きた、スパルタを中心とするペロポネソス同盟とアテナイを中心とするデロス同盟との間の戦争だ。スパルタはギリシア半島南部の都市国家で、地域の覇権国であった。徹底した軍事国家で、身体に問題のある幼児は殺され、男子は 7 歳になると家を出て軍事教練を受けて兵役の義務を負い、23 年間国家に奉仕して 30 歳になってやっと完全な市民権を得た。アテナイは対照的に、港湾都市で貿易国家であった。兵営国家のスパルタと異なり、アテナイは開かれた社会で、民主主義が実践された。

紀元前 490 年のペルシアの侵略に際して、スパルタはスリーハンドレッドで有名なテルモピュライの戦いで自己犠牲による時間稼ぎで貢献したが、決定的だったのは紀元前 480 年のサラミス海戦におけるアテナイ艦隊によるペルシア艦隊の撃破だ。ペルシア戦争におけるアテナイの貢献は、国家としての地位を向上させる。さらにその後、アテナイは同盟国を増やし、貿易を拡大し、富を蓄積して国力を増していく。こうした新興国アテナイの台頭に、覇権国であったスパルタは不安を覚える。

こうした中、同盟国の存在が事態を複雑にする。スパルタの同盟国であるコリントスの海軍力増強は、コリントスと紛争を抱えていた中立国のケルキュラに恐怖を与え、ケルキュラはアテナイに支援を求める。アテナイはエスカレーションを避けるために「攻撃を受けるまでは戦うな」との条件を付しつつ小規模な艦隊を派遣するが、これは、抑止には小さ過ぎるが、コリントスの怒りを招くには十分な規模の戦力投射となってしまった。

スパルタの他の同盟国であるメガラも状況を悪化させる。メガラはアテナイから逃げた奴隷を保護するなどアテナイから見て非友好的な行動を続けており、アテナイは紀元前 432 年に、メガラとの貿易を禁止するメガラ勅令を出す。これはいわゆる経済制裁だが、今から 2500 年も前に「経済の武器化」が実践されていたことは興味深い。同盟国の被害に黙っている訳にはいかず、スパルタはアテナイに対してメガラ勅令を撤回するよう要求する。アテナイは、撤回はギリシアにおいて築きあげてきた信頼を毀損するものとしてこれを受け入れず、またアテナイの人々もスパルタの行為をアテナイへの内政干渉と激高する。スパルタ内部には戦争回避を主張する人物はいたが、アテナイを罰すべきという強硬派の意見が強まる中で、そうした声はかき消される。さらに、コリントスはスパルタが自らを支援しないのであれば同盟

を抜けると示唆し、このことはアテナイのこれ以上の台頭を座視することはスパルタの同盟網を毀損するもので許容できないという立場を強化する。結局スパルタはアテナイと戦うことを決定する。

軍事中心国家でランドパワーのスパルタと、民主主義を実践するシーパワーのアテナイ。政治体制と地政学の観点からは、スパルタは中国と、またアテナイは米国と、共通点が見てとれる。しかし、アリソン教授は「力」にフォーカスし、既存の覇権国と台頭する新興国という切り口で、スパルタ＝米国、アテナイ＝中国というアナロジーにおいて教訓を読み取ろうとする。（同教授の分析が価値やルールを軽視しているとの批判はあるが、ここでは触れない。）アリソン教授は、トゥキディデスの「アテナイの台頭と、それがスパルタに与えた恐怖が、戦争を不可避にした」という言葉を引用している。しかし、アリソン教授は同時に、過去 500 年の 16 件の事例研究において、4 件では戦争は回避されたと分析。米中戦争は必ずしも不可避ではないとも主張する。

習近平主席が「トゥキディデスの罠」に言及することは好都合であろう。力を付ける中国を恐れず受け入れるべきとの含意だ。習近平主席は、米中会談冒頭で「我々は競争相手ではなくパートナーとなり、互いに高め合い、共に繁栄し、新時代における大国間の正しい付き合い方を切り拓くべきです。」と強調した。米国は AI を含む技術革新と経済のダイナミズムにおいて他を圧倒するが、トランプ政権の下で、国際社会におけるリーダーシップには陰りがみられ、同盟国との関係にも隙間風が吹く。

ペロポネソス戦争は、スパルタの勝利に終わる。しかし、負けたアテナイはもちろん、スパルタも疲弊し、ギリシアの黄金期は終焉を迎える。軍事技術が格段に進歩し核兵器を保有する米中が全面戦争に至った場合に、その被害はペロポネソス戦争の比ではない。今回の米中首脳会談において、良好な雰囲気の中で「建設的戦略安定関係」が合意されたことを我々は喜ぶべきであろう。他方で、それに 3 年間という期限が付されていること、そして米中の「建設的戦略安定関係」が同盟国やパートナー国・地域に及ぼす影響など、今後の進展を注意深く見守る必要があるだろう。

参考文献：Graham Allison, *Destined for War*, Scribe 2017

(2026 年 5 月 24 日・記)